コラム：吉田公平先生
（東洋大学名誉教授）

中江藤樹の年譜に関する清水安三の取組

中江藤樹の生涯について論ずる時には、これまでは『藤樹先生全集』に収める所謂「年譜」を基本にするのが通例であった。加藤盛一著『近江聖人　中江藤樹』がその代表的なものであろう。清水安三も加藤盛一に学んだこともあって、加藤盛一の中江藤樹研究には敬意を表している。しかし、中江藤樹には「年譜」の他に「行状」と「事状」がある。清水安三は「年譜」のみが正しいという先入観から自由になって、三書を資料としての信憑性は同格のものと位置付けた上で、用意周到に比較しながら、改めて中江藤樹の生涯を確認しようとした。中江藤樹の生涯を、年次を追いながら読み続けて、「年譜」に記載のない年次のところは「行状」や「事状」の記載を取り上げて補ったりする。また、藤樹自身が書き込んだと思われるところがあるとか、人名に出あえばその人はいかなる人物であったか、藤樹とはいかなる関係の人であったのか、などを丁寧に補筆して理解している。記載があっても、その内容については、門人の立場からはそのような叙述は僭越であるはずの表記があるとか、人名や地名などの誤認や誤記を指摘しているとか、地域の言葉からして、不自然であるとか、三書を読み合わせて比較検討して、「年譜」のみに依存してきたことに対して、根本的に書き直すことを提案している。清水安三の『中江藤樹』は『史的中江藤樹―藤樹学派の抵抗―』を下敷きにしたものであり、年期が係っているものである。この清水安三の提案を軽く見過ごすことはできないのではあるまいか。改めて、「年譜」「行状」「事状」の三書の全記録を中江藤樹の年次に即して、先入観から自由になって、根本から中江藤樹の生涯を再構成する試みを敢行されることを祈念したい。

その際には、もう一つ留意していただきたいことがある。これまで中江藤樹の生涯を語るときに、中江藤樹の書翰が十分には活かされていない。書翰そのものの研究は不十分なだけに、すぐさまには生かすことは難しいかもしれないが、『藤樹先生全集』に収める書翰の編集作業は、とりわけ丁寧に行われた。藤樹が門人知友に与えた書翰は、受領した門人が自前で写し取り、原本あるいは副本を門人同士で廻し読みした気配がある。そのために全集を編纂するに先立って、書翰の蒐集したところ、同一門人に与えた同じ文面の書翰が複数集まることになった。その際には、編集委員は書翰の真偽を俄に即断せずに、本文に採用しなかった書翰の文面を、横に並記するという處置をとった。賢明な判断である。中江藤樹は成長し続けた思索者であった。生涯、定論を持たなかった。謙虚な学徒であった。学問とは「学びて問う」ことである。生涯学び続けて一所に立ち止まることはなかった。学びながら、その都度に所得を得ながら、まだまだ、もう少し、先が上があるはずだという思いを持ち続けた仁者であった。「新たな問い」を発見発明（ディスカバー）することを自分に課した「未完成」の人であった。その意味でこそ我々の先達であったと言えます。

ひじりの声　上田　藤市郎

参議院議員選挙が終わり、様々な政党が現れた。有権者各自が自分の意思を表明した結果である。

民主主義の原則は、選挙結果に基づいて政治が行われるので、たとえ自分の意にそぐわない政治が展開されたとしても受け入れなければならない。政治の変化を求めるのであれば、次回の選挙で意思を表明することが大切である。現在の日本の憲法では、国家や政党や他人に無理強いされることなく自分の意見を言うことが認められている。収入が無くなっても最低限の生活ができるように国が保障している。国が戦争を始めることができないようになっているから、戦前のように他国の人を殺しに行かされることもない。毎年八月には平和の維持や個人の命の尊さがとりあげられるが、日本の憲法が根底のところで国民を守っていることを忘れてはならない。他国からの侵略に備えて兵器を増やそうという意見があるが、兵器で平和は守れない。互いの殺し合いが再現されるだけである。今なお各地で戦闘が行われているが、この八十年間、戦争を拒絶してきた日本の政治の在り方が、「幸せ」という人生の宝物をすべての人々にもたらし続けてきたのである。過ちを二度と繰りかえさないという「不戦の誓い」は、先人が私たちに残してくれた至宝であり、これは永遠に守っていかなければならないのである。